

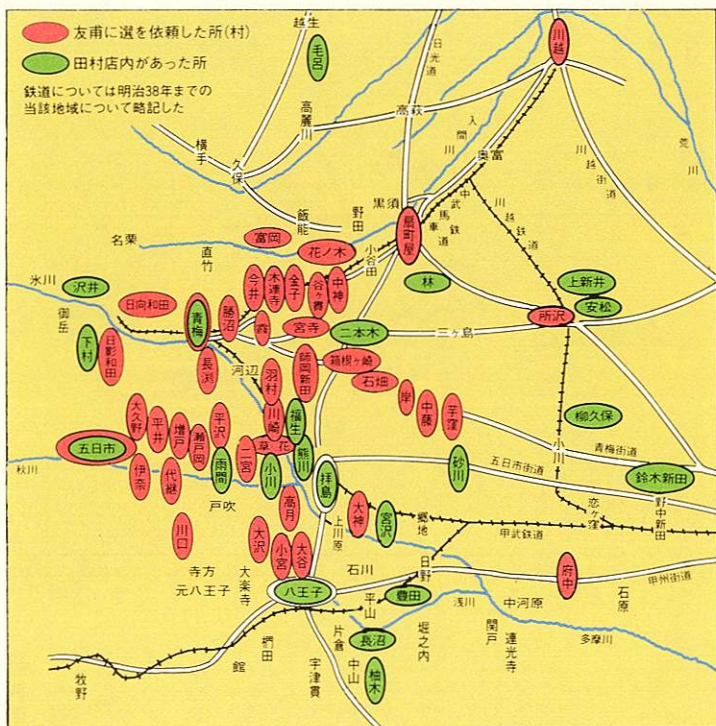
梅里の俳諧交流とその他の交流 梅里の交流は重層的で、近隣の僧、村役人、医師、商人などの村の俳人との交流をもっていた。

■村の俳人玉石館梅里

天明年間（一七八一〜八八年）、多摩地方で俳諧が隆盛をみせるようになった。やがて一九世紀に入り、文化文政・天保期（一八〇四〜四三年）になって、江戸地回り経済圏が進展するとともに、多摩地方の村々での俳諧の普及と発展にはいちじるしいものがあった。

文化文政・天保期の福生を代表する村の俳人に、熊川村の玉石館梅里（ばいり）がいる。梅里は本名を石川亀三郎（弥八郎）といい、幕府領名主を世襲していた石川家の当主であった。梅里の父康十郎と祖父の庄蔵は、いずれも名主を務めていたが、祖父の庄蔵は宝暦年間（一七五一〜六三年）に旭朝という俳号を名乗り、父の康十郎は天明年間に玉石亭（きせいてい）楼（りょう）良州（りょうしゅう）玉川亭喜鶴（きかく）などと号し、俳諧を楽しんでいた。

梅里は投句や催し（句合、交流（俳人の往来）など、俳諧の活動を積極的に行った。投句は江戸の宗匠への投句もあったが、たいていは近隣や周辺の村で行われた句合へのものであ



友甫選の俳諧催し分布 明治8年～31年に各村々の俳人たちが俳諧催しに当り、友甫に選を依頼した村々を示す。

勸次郎から家業を引き継ぎ拡大させたのが、田村家に養子として入った十兵衛であった。この十兵衛も福泉舎友甫と号する俳人であった。友甫の実父指田七郎右衛門は、上川原村（昭島市）の名主を務めていたが、同時に繭や生糸などの仲買人としても活躍していた在郷商人であった。友甫が

った。また梅里が当主であった文化文政・天保期、石川家では小口金融を行ったり、蚕を生産して販売し、織物の売買を行っていた。在郷商人化していく過程で、人びととの交流が広がり、深められていったが、このことが梅里の俳諧にも大きな影響を与えたにちがいない。

■福泉舎友甫の活躍

梅里と交流のあった福生村の田村勸次郎は幽夢と号し、文化文政年間（一八〇四～一九年）から幕末にかけての有力な村の俳人の一人であった。幽夢は同時に名主としても地域の人びとに大きな影響力をもち、またすぐれた経営手腕をもつ酒造家でもあった。当時村のなかでは淨瑠璃、易、碁、講釈、人形芝居など、多様な文芸、娯楽があり、このような風土が俳諧をさかんにした一因であったと思われる。



友昇批点菰露他発句詠草集 奇朋軒菰露は横浜の生糸仲買商で、友昇の吟友。福生市登録有形文化財。



芭蕉句碑 春もや、けしきと、のふ 月と梅
1877年(明治10)、福泉舎友甫(田村十兵衛)が選
暦を記念して建立。福生市登録有形文化財。福
生神明社。

俳人として成長するもとは、実家の指田家にあった。実父は古友^{こゆう}、長兄は友子^{ともこ}と号した村の俳人であったから、実家において俳諧の素養を身につけた友甫は、養家でも環境に恵まれていた。一八三九年(天保十)に青梅で催された金比羅月次奉灯納句合^{つぎまはろうじつおとくあわせ}に入集している。その後しだいに技量を高めていったようであり、一八五八年(安政五)、大磯にあった嶋立庵^{しまだつあん}評による『初心俳諧百人集』に画像入りで入集している。

幕末から維新时期にかけて、友甫の名は俳諧番付にもみられるようになり、全国的にも知名度を高めていった。維新後友甫は、名主の公職や当主の役目を子どもの半十郎にゆずり、俳諧に打ち込めるようになったからでもある。友甫の宗匠としての地位を示すものに、現在、神明社に建っている芭蕉句碑がある。芭蕉の句碑を建てるのにふさわしい俳諧の実力があつたということである。友甫はまた、近隣の村々の句合の選者(宗匠)として、その活動は村々の俳人たちに大きな影響を与えた。

■森田友昇

福生村出身の俳人森田友昇^{もりたとものぶ}は、一八二九年(文政十二)に生まれた。名は太四郎(一説に勇次郎)と伝えられている。友昇は一八五九年(安政六)に開店した横浜の生糸売込商の芝屋で支配人を務めたが、維新後、芝屋を離れて鰹魚商(海産物と生糸を商っていたらしい)を営んだ。同時に嘯月庵^{せうげつあん}と号し、横浜と多摩地域を拠点として活躍した俳人でもあつた。



木造・森田友昇坐像 一木造、左手に短冊を
挟み、右手に筆を持ち、八徳(衣)をまどって
正座する。像高20.5cm。作者・製作年代未詳。
福生市登録有形文化財。友昇の末裔、千村美
礼子氏旧蔵。

友昇が、俳人としてその存在を知られたのは、最初の句集『高むしろ集』(明治三年)である。のち一八七九年(明治十二)に八王子の名庵松原庵を継ぎ、それを記念して出版さ

れたのが『浅川集』である。詩人平塚梅花が記す序文によれば、友昇は福生村の田村友甫に俳諧を学び、松原庵嗣号の話は田村友甫ほか七人の郷人からもち込まれたという。

友昇が継承した松原庵の交流の広がりには、八王子を中心とした多摩地域や隣接する入間、横浜やその周辺であり、高名な俳人が多数いた東京とも多くの接点をもっていた。多摩地域を代表する俳人となった友昇であったが、一八八五年(明治十八)、五十七歳でこの世を去った。

森田友昇俳諧集『浅川集』

『浅川集』は、一八七九年(明治十二)秋に友昇が松原庵を襲名したときの記念俳諧集で、翌年発刊された。嗣号披露は、俳諧宗匠にとっては重要な行事であり、この『浅川集』もそれにふさわしい大規模な撰集である。

序文は、平塚梅花の文章を神奈川の自由民権運動の指導者であった石坂昌孝が浄書、後書きは俳諧宗匠の三森幹雄と女流画家の奥原晴湖が寄せている。友昇は多方面にわたる文化人や地方経済人の支援をうけていたといわれている。